

# 教室で異文化交流

## 福岡・香陵小 留学生・外国籍児童と

外国籍の児童が多く通う福岡市東区の市立香陵小学校。道を隔てた隣に、約2200人の留学生が生活する九大国際交流会館があり、現在、中国やマレーシアなどより力国から来た23人が通う。日本語指導だけでなく、外国人との交流を図るなど、特性を生かした国際理解教育を進めている。

### 自国学ぶ効果も

7月上旬、タイやウズベキスタンなど9力国からの留学生11人が体育館に姿を見せた。総合的な学習の時間を利用しての留学生との交流会。6年生約60人が1の班に分かれ、それぞれが日本の文化を紹介した。

ミャンマー(ビルマ)から来たウエイさん(28)を囲む班では、子どもたちが日本の年中行事を解説。その後、ウエイさんがミャンマーの食文化などについて写真や空手を習っている子歴史を調べて技を披露したり、書道を知っている子は筆の持ち方や運び方を教えたり…。安松広子校長は「他国の理解だけではなく、日本についての発信も同時にできるのが交流会。自分の国への理解も深まります」と話す。



留学生との交流会で、ナイジェリアからの留学生(左)に筆の運び方などを教える子どもたち



### 「じわっと理解」

同小では、外国籍児童を受け入れるため、校舎内に多くの工夫を凝らす。

校内には、あちこちに外国語。校長室の掛け札の下には、中国で使われている簡体字、さらにその下には英語でも書かれる。児童用のげた箱には、フランス語やモンゴル語で「おはようございます」の文字。ともに学友仲間の顔写真が入った世界地図も飾られている。

1階にあるのが、日本語指導教室「ワールドルーム」。外国籍の児童たちが日本語を学ぶ教室だ。担当

ワールドルームの仲間や保護者の前に、自分の国について発表する児童。いずれも福岡市東区香陵浜4丁目



### 外国籍児童生徒は491人

福岡市中小、日本語教室は14校

福岡市教委によると、5月1日現在、市内の市立小中学校に通う外国籍児童生徒数は491人。ここ5年は、500人前後で推移している。

最も多いのは東区の城浜小で、現在、全児童221人のうち61人を占める。

市教委では、香陵小を含む11小学校と3中学校に日本語教室を設置。教室の有無にかかわらず、学校から要請があった場合、日本語指導員を派遣している。指導員は定期的に学校を訪問し、日常会話や基礎的な読み書きを指導する。

する池田尚登教諭は「子どもたちの状態、文化背景は一人ずつ違う。その上で指導に当たらなければならない」と話す。

とりわけ大きいのが宗教の問題だ。例えば、イスラム教徒であれば、豚肉は食べられない。子どもに合わせた対応を考え、理解を求める。

安松校長は「日本語が全くしゃべれない子と一緒に暮らし、トラブルもある中で、子どもたちは外国というものをじわっと理解してきている」と話す。「仲良くなっていく体験から、違いを認められる人になつてくれると思います」(山下知子)

## ネット・ゲーム危険知って

### 交流サイトでも性被害 ■ 幼児期は現実感喪失

県警・NPO講演

インターネットやケータイといった電子メディアと子どもとの関わりについて考える講演会が今月4日、福岡市役所で開かれた。子どものネット利用に詳しい警察官とNPO法人の代表者が、現状や周囲の大人の関わり方について話した。

市教委が主催し、学校関係者や市民ら約2000人が集まった。

県警少年課の金子良太巡查部長(36)は、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)やゲームサイトなど、出会い系以外で他人と交流可能なサイト

が取って代わっている。金子巡查部長は、子どもの友人関係作りでCSが介することが一般化している指摘し、「犯罪に巻き込まれる可能性があるなど、大人がまずメディアを知ってほしい」と話した。続いて、NPO法人子どもメディア(福岡市)の古野陽一専務理事(49)が「子どもとメディアのよい関係づくり」と題して講演した。

古野専務理事によると、